

## 帰属スタイルが小学5年生のレジリエンスに及ぼす影響

原 郁 水 (弘前大学教育学部教育保健講座)  
都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座\*)

**要約** 本研究は、小学5年生を対象に帰属スタイルがレジリエンスにどのような影響を及ぼすかを検討した。レジリエンスは、未来志向、興味関心、感情調整の下位尺度からなる小学生用レジリエンス尺度を使用した。困難場面として友人トラブル場面と学業失敗場面の二つの場面を取り上げ、原因の所在(内-外)と永続性(一時的-永続的)の点から帰属スタイルを捉えた。その結果、

1) 子どもの帰属のスタイルの分布においては、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が認められ、偏りが認められた。場面に関わらず原因の所在において内的に帰属するものが多いことが示された。

2) 原因の所在と永続性を独立変数、レジリエンスを従属変数とした二要因の分散分析を行ったところ、友人トラブル場面では未来志向とレジリエンス合計において帰属の永続性の要因に主効果が認められた。学業失敗場面では興味関心とレジリエンス合計において帰属の永続性の要因に主効果が認められた。これらのことから今後、レジリエンスを高める授業を行っていく際には、帰属スタイルの永続性の要因に着目していく必要があることが示唆された。

**キーワード**: レジリエンス, 帰属スタイル, 小学5年生, 質問紙調査

### I. はじめに

近年、困難や逆境など回復に関する心理的過程を「レジリエンス」という概念で捉えようとする研究がなされている。Mastenら(1990)は、レジリエンスを「困難で脅威的な状況にもかかわらず、うまく適応する過程・能力・結果」と定義している。

レジリエンス研究は、Garmezyが1970年代に発表したことに端を発している。Garmezyは、統合失調症患者の転帰に個人差があったことから、リスクをもちながらも良好な適応の経過をとる場合の要因を明らかにしようとした。

我が国においては、レジリエンス研究は2000年代から行われ始めた。森ら(2002)は、生きる力に関連が深いものとしてレジリエンスを取り上げており、変化が激しく、いつ誰が困難に直面するかわからない現代において困難を排除するのではなく、困難を乗り越え、困難があってもうまく適応することが重要ではないかと考えらえる。

レジリエンスを高める教育実践は我が国ではあまり行われていないが、すでに欧米で行われている。その実践は、「スキル重視型」、「体験重視型」、「環境重視型」の3つに分けられる。レジリエンスを高める要因の研究は、1) 原因帰属といった認知的要因、2) ポジティブな経験、達成経験といった経験及び体験に関する要因、3) ソーシャルサポートや養育態度といった環境に関する要因、といった側面から検討されている。

そこで本研究では、スキル重視型と関連すると考え

られる原因帰属に着目する。原因帰属とレジリエンスに関する研究としてMartin-Krummら(2003)のものがあげられる。彼らはスポーツの失敗場面の帰属とレジリエンスとの関連を検討し、帰属のスタイルとその後の達成や不安などに関連があることを示している。この研究は原因帰属とレジリエンスとの直接的な関係を検討したものではないが、失敗という困難に直面した際に原因帰属が何らかの影響を与えていることが示唆された。このようにレジリエンスは原因帰属といった認知的スキルと何らかの関連があると考えられるが、この関係を直接的に検討したものはあまり見られない。

原因帰属はWeinerが提唱したものであり、ある行為によってある結果がもたらされた際にその原因を何に求める(帰属する)かによってその後の動機づけの水準が規定されるとするものである。Seligmanは、楽観性との関係から原因帰属を帰属スタイルや説明スタイルと称した。帰属には所在(内在性)、永続性、普遍性の3次元があり、成功の原因を内的、永続的、普遍的な要因に、失敗の原因を外的、一時的、特異的な要因に帰属することを楽観的な帰属スタイルとしている。Seligmanらのグループは、楽観的な帰属の様式を小学生に教える包括的なプログラムであるPRP(Penn Resiliency Program)を行うことにより、レジリエンスが高まったことを報告している(Gillham et al., 2006)。

我が国の帰属スタイルに関する研究として増田(1993)、藤南・園田(1994)、家接ら(2001)のものがある。増田(1993)は、大学生の帰属スタイルと抑うつについて検討し、失敗場面において、永続性(安定性)と普遍性の合計得点が抑うつと正の相関がある

\* 現 愛知教育大学教育学研究科非常勤講師

ことを示した。これは、永続的・普遍的な帰属スタイルと抑うつとの関連が高いことを示唆するものである。藤南・園田(1994)は、大学生において、永続的・普遍的な帰属スタイルと否定的な出来事(ネガティブライフイベント)の両方が高いときに、抑うつなどのストレス反応が高くなることを示した。家接ら(2001)は、内的で安定的な帰属スタイルが、抑うつや自尊感情と相関が高いことを示している。このように永続的・普遍的な帰属スタイルや、内的・永続的な帰属スタイル(家接ら, 2001)が抑うつや自尊感情と関連があることが示されている。

以上のように、欧米では小学生に楽観的な帰属スタイルを教える事によってレジリエンスが高まることが報告されており、我が国では、帰属スタイルと抑うつや自尊感情の関連が示されているものの、レジリエンスと帰属スタイルについて直接検討した研究はあまり見受けられない。帰属スタイルは学ぶことによって習得できることから子どものレジリエンスを高める方法を確立していくためには、帰属スタイルとレジリエンスとの関係を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、友人関係でのトラブル場面と学業に関する失敗場面という二つの場面の帰属スタイルに着目し、この帰属スタイルとレジリエンスとの関係を検討することとした。

なお、この研究を行うにあたり、以下の3点を考慮した。

- 1) 子どもは、多くの時間を学校で過ごし、友人関係と学習に関する経験の頻度及び嫌悪感が高いことが示されていることから困難場面として友人関係でのトラブル場面と学業に関する失敗場面を取り上げることとした。
- 2) 帰属スタイルの内容は、家接ら(2001)の結果を参照し、普遍性に関する内容は小学生には難解なものではないかと考え、今回は取り扱わないこととした。子どもの理解のしやすさという点から原因の所在(内-外)と永続性(一時的-永続的)に注目し、ここでは、帰属スタイルを原因の所在と永続性の組み合わせを指すものとする。
- 3) 小学校保健体育科保健領域では、小学校5年生で単元「心の健康」が設定されている。この単元においてレジリエンスの観点から教育方法・教材開発を行い、子どものレジリエンスを高める方法を確立していきたいと考えているために、小学5年生を対象とした。

こうした条件のもとで、友人トラブル場面と学業失敗場面において、原因の所在と永続性の組み合わせである帰属スタイルが子どものレジリエンスにどのように影響を及ぼしているかを検討した。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

A県内B市の7校の小学5年生688名(男児334名, 女児354名)を対象に調査を行い、回答に不備の無かった665名(男児316名, 女児349名)を最終的な分析の対象とした。

### 2. 手続き

この調査は、B市教育委員会から実施計画の承認を得て、当該の学校長に趣旨説明がなされ、校長および職員会議の了解を得て実施された。

調査は、無記名とし、自記式による質問紙調査法により、20xy年2月から3月に実施した。質問紙を各学校に配布し、学級担任の監督の下に授業時間を利用して一斉に行われた。

### 3. 質問紙

#### (1) 小学生版レジリエンス尺度

原・都築<sup>20)</sup>の小学生用レジリエンス尺度を使用した。この尺度は将来に希望を持ち努力する力である「肯定的な未来志向」(以下未来志向とする)、様々なことに興味や関心を持ち追求しようとする力である「興味関心の追求」(以下興味関心とする)、感情をうまくコントロールする力である「感情調整」の3つの下位尺度から構成されている。肯定的な未来志向として「自分の目標を大事にしている」などの5項目、興味関心の追求として「ものごとに対する興味や関心が強いほうだ」などの5項目、感情調整として「いつも落ち着いているようにこころがけている」などの3項目、計13項目からなる。これらの全ての項目を合計したものをレジリエンス合計とする。

各項目に対して「全くあてはまらない(1点)」、「あまりあてはまらない(2点)」、「どちらでもない(3点)」、「ややあてはまる(4点)」、「かなりあてはまる(5点)」の5段階で回答を求めた。

#### (2) 帰属スタイルに関する項目

困難場面として、友人関係でのトラブル場面と学業に関する失敗場面を設定した。青柳・細田(1992)<sup>21)</sup>や増田(1994)<sup>16)</sup>の研究をもとに、原因の所在及び永続性に関する質問項目を作成した。各項目に対して5件法で回答を求めた。

友人場面における原因の所在に関する質問は「友達とけんかをしてしまった時、あなたはその原因がどこにあると思いますか」とした。その回答は「友達や周囲に全て原因がある(1点)」、「友達や周囲にやや原因がある(2点)」、「どちらでもない(3点)」、「自分にやや原因がある(4点)」、「自分に全て原因がある(5点)」とした。

友人場面における永続性に関する質問は「今後また

同じ原因でけんかが起きると思いますか」とした。その回答は、「同じ原因でけんかは二度と起きない（点1）」、「同じ原因でけんかはあまり起きない（2点）」、「どちらでもない（3点）」、「同じ原因でけんかが少しは起きる（点4）」、「同じ原因でけんかが必ず起きる（5点）」とした。

学業場面における原因の所在に関する質問は「学校のテストで悪い点を取ったとき、あなたはその原因がどこにあると思いますか」とした。その回答は、「テストや周囲に全て原因がある（1点）」、「テストや周囲にやや原因がある（2点）」、「どちらでもない（3点）」、「自分にやや原因がある（4点）」、「自分に全て原因がある（5点）」とした。

学業場面における帰属の永続性に関する質問は、「今後また同じ原因でテストでわるい点をとると思いますか」とした。その回答は、「同じ原因でわるい点を二度ととらない（1点）」、「同じ原因でわるい点をあまりとらない（2点）」、「どちらでもない（3点）」、「同じ原因でわるい点を少しはとる（4点）」、「同じ原因でわるい点を必ずとる（5点）」とした。

### (3) 帰属スタイルの特定

友人トラブル場面と学業成績場面のそれぞれにおいて、原因の所在に関する質問項目で「1. 周囲に全て原因がある」及び「2. 周囲にやや原因がある」を選択したものを外的帰属群、「3. どちらでもない」を選択したものを中立群、「4. 全て自分に原因がある」及び「5. 自分にやや原因がある」を選択したものを内的帰属群とした。

帰属の永続性に関する質問項目で「1. 同じ原因で全く起きない」及び「2. 同じ原因であまり起きない」を選択したものを一時群、「3. どちらでもない」を選択したものを中立群、「4. 同じ原因で必ず起きる」及び「5. 同じ原因で少しは起きる」を選択したものを永続群とした。

## Ⅲ. 結果

### 1. 帰属スタイルの各群の人数

#### (1) 友人トラブル場面

友人トラブル場面の人数を表1に示す。各群の人数に対してカイ2乗検定を行ったところ、有意差が認め

表1 友人トラブル場面における帰属スタイルごとの人数

		原因の所在			計
		外的帰属	どちらでもない	内的帰属	
永続性	一時的帰属	24	63	184	271
	どちらでもない	13	75	65	153
	永続的帰属	46	34	161	241
計		83	172	410	665

$\chi^2$ 検定  $\chi^2=70.41$   $p<.01$

られ、人数の偏りが示された ( $\chi^2=70.40$ ,  $p<.01$ )。中立群を以降の分析から除外することとした。

#### (2) 学業失敗場面

学業失敗場面の人数を表2に示す。各群の人数に対してカイ2乗検定を行ったところ、有意差が認められ、人数の偏りが示された ( $\chi^2=79.40$ ,  $p<.01$ )。友人トラブル場面と同様に中立群を以降の分析から除外することとした。

表2 学業失敗場面における帰属スタイルごとの人数

		原因の所在			計
		外的帰属	どちらでもない	内的帰属	
永続性	一時的帰属	7	21	234	262
	どちらでもない	4	50	91	145
	永続的帰属	10	14	234	258
計		21	85	559	665

$\chi^2$ 検定  $\chi^2=79.41$   $p<.01$

## 2. レジリエンスと帰属スタイルとの関連について

### (1) 友人トラブル場面における帰属とレジリエンス

友人トラブル場面における帰属スタイルごとの各得点を表3に示す。原因の所在（外-内）及び永続性（一時的-永続的）を独立変数とし、レジリエンスの各尺度の得点及び合計点を従属変数とし二要因の分散分析を行った。その結果、未来志向及びレジリエンス合計において帰属の永続性の主効果が認められた（未来志向： $F=4.57$ ,  $p<.05$ 、レジリエンス合計： $F=4.19$ ,  $p<.05$ ）。原因の所在の主効果及び交互作用は、有意ではなかった。従って、友人トラブル場面において帰属の永続性の要因は、未来志向とレジリエンス合計に影響を及ぼしていると言える。

### (2) 学業失敗場面における帰属スタイルとレジリエンス

友人トラブル場面における帰属スタイルごとの各得点を表4に示す。友人トラブル場面と同様に2要因の分散分析を行った。その結果、興味関心及びレジリエンス合計において、帰属の永続性の主効果が認められた（興味関心： $F=4.84$ ,  $p<.05$ 、レジリエンス合計  $F=3.26$ ,  $p<.05$ ）。友人トラブル場面と同様に、原因の所在の主効果及び交互作用は有意ではなかった。従って、学業成績場面において帰属の永続性の要因は、興味関心とレジリエンス合計に影響を及ぼしていると言える。

表3 友人トラブル場面における帰属の所在と永続性からみたレジリエンス得点と標準偏差

	内的		外的		二要因分散分析 (F値)		
	永続的	一時的	永続的	一時的	所在	永続性	交互作用
	(n=161)	(n=184)	(n=46)	(n=24)			
未来志向	19.14 (4.69)	20.7 (4.01)	19.7 (4.73)	20.8 (4.01)	0.29	4.57*	0.20
興味関心	19.47 (3.47)	20.2 (3.50)	19.9 (3.68)	20.5 (2.81)	0.63	1.63	0.03
感情調整	9.9 (2.88)	10.4 (2.58)	9.6 (2.78)	10.1 (1.67)	0.71	1.71	0.00
レジリエンス合計	48.5 (8.94)	51.23 (8.01)	49.3 (9.35)	51.3 (5.86)	0.12	4.19*	0.08

注) \*:p&lt;.05

表4 学業失敗場面における帰属の所在と永続性からみたレジリエンス得点と標準偏差

	内的		外的		二要因分散分析 (F値)		
	永続的	一時的	永続的	一時的	所在	永続性	交互作用
	(n=234)	(n=234)	(n=10)	(n=7)			
未来志向	18.9 (4.63)	21.0 (4.06)	19.6 (5.60)	20.6 (3.55)	0.03	1.87	0.23
興味関心	19.1 (3.73)	20.6 (3.39)	18.6 (4.99)	21.1 (4.45)	0.00	4.84*	0.37
感情調整	10.0 (2.60)	10.5 (2.73)	10.5 (4.06)	10.9 (4.18)	0.35	0.39	0.01
レジリエンス合計	48.04 (8.88)	52.0 (8.21)	48.7 (13.26)	52.6 (8.75)	0.08	3.26*	0.00

注) \*:p&lt;.05

#### IV. 考察

本研究は、帰属スタイルにおける原因の所在と永続性の要因を独立変数、レジリエンスを従属変数として分析を行った。その結果、帰属の永続性要因の主効果がトラブル場面（未来志向とレジリエンス合計）と学業失敗場面（興味関心とレジリエンス合計）で認められ、原因の所在要因に主効果が認められなかった。

ここでは、1) 帰属スタイルの分布、2) 帰属スタイルとレジリエンスとの関連、3) レジリエンスを高める教育、について若干の考察を行い、今後の検討課題を述べる。

##### 1. 帰属スタイルの分布

古川ら (2002)<sup>22)</sup> は、正の場面とテストでわるい点を取るといった負の場面における小学6年生の帰属様式を調査し、外的帰属を0点～内的帰属を8点とする尺度において負の場面では平均値が5.5点と他の帰属様式のそれよりも高く、原因の所在を内的にするものが多かったことを示している。本研究の結果においても友人トラブル場面と学業失敗場面のいずれも帰属スタイルの人数に偏りがみられ、内的帰属をするものが多く、外的帰属をするものが少なかった。丹羽 (1990)<sup>23)</sup> は小学5～6年生を対象に、テストの点数に関する成功－失敗を各自に判断させ、その原因を自由記述で求めた。その結果、失敗においては43.5%が一時的努力に帰属し、能力や気分、性格を含めると80%以上が内的に帰属していたことから子どもは結果＝能力であり、努力量は結果であり能力であるとする認識を持っていると述べている。本研究でも失敗場面で内的帰属をするものが多かった。このことから負の場面で内的な帰属を選択するのは子どもの特徴であると推測できる。特に学業失敗場面では、失敗したこと

自体が努力不足、能力不足であると捉えられがちであると推測される。

##### 2. 帰属スタイルとレジリエンスとの関連

今回の結果では、永続性の要因のみがレジリエンスに影響を及ぼしていた。この結果は、大学生を対象に調査した家接ら<sup>18)</sup>の結果と異なる。家接らは、原因の所在を2次元として捉えたが、本研究では、対象者が小学5年生であることから子どもの理解や回答のしやすさを考慮して、原因の所在を1次元で捉えた。子どもにおいては、失敗の原因を内的か、外的かのどちらかに帰属しなければならない場合には、自分にその原因があると捉える傾向が見られた。原因の所在が内にあるか外にあるかについて、内的に捉えるものが多いことからレジリエンスに影響を与えなかったと考えられる。

また、藤南・園田 (1994) や増田 (1993) は抑うつには原因の所在よりも永続性（安定性）と普遍性の両者が重要であるとしている。こうしたことから、レジリエンスにおいても原因の所在よりも永続性の方が重要である可能性も考えられる。原因の所在は永続性や普遍性とは異なる位置づけであり、原因の所在は抑うつ症状を強めるのではなく、自尊心の低下につながるという指摘 (Abramson et al., 1989)<sup>23)</sup>もある。子どもでも同様の結果が示されるのか、検討する必要があると考えられる。

##### 3. レジリエンスを高める教育

本研究では、困難場面として友人トラブル場面と学業失敗場面の2つを取り上げた。小学生が友人関係でトラブルを引き起こすことや学業で失敗することは身近であり経験しがちな事である<sup>19)</sup>。今回の結果では、永続性次元からとらえると、どちらでもないを除くと

一時的帰属と永続的帰属がほぼ同程度だった。これらの場面で永続的に帰属することは、自分はずっと勉強ができない、ずっと友達とけんかをするを捉えることを意味する。この帰属スタイルを永続的なものから一時的なものに変えることが、レジリエンスを高めることにつながる。渡辺<sup>25)</sup>はレジリエンスを高めるための一つとして重要な他者からの肯定的なフィードバックをあげている。帰属スタイルにおいても教師などの重要な他者が失敗後にフィードバックを行うことが有効であることが推測される。

帰属スタイルは教える事が可能である<sup>15)</sup>。今回、帰属の永続性要因に主効果のみとめられたことから、特に永続性次元についてのフィードバックや教育によって、子どものレジリエンスを高めることの意義が示されたといえる。

#### 4. 今後の検討課題

今回は、帰属スタイルとして、原因の所在と永続性を取り上げた。その際、原因の所在を内的なものか、あるいは外的なものかという次元にとらえたが、今後は、家接<sup>18)</sup>のように内的か外的かを二次元で捉えることも考えられ、測定の工夫を行う必要がある。今回、永続性次元に着目した帰属スタイルを教える事が、レジリエンスを高めるのに有効であることが示唆された。我が国においても教育現場において実際に帰属スタイルを教え、レジリエンスが高まったどうかを検証することが重要であると考えられる。

#### V. おわりに

本研究は、小学5年生を対象に帰属スタイルがレジリエンスにどのような影響を及ぼすかを検討した。レジリエンスは、未来志向、興味関心、感情調整の下位尺度からなる小学生用レジリエンス尺度を使用した。困難場面として友人トラブル場面と学業失敗場面の二つの場面を取り上げ、原因の所在(内-外)と永続性(一時的-永続的)の点から帰属スタイルを捉えた。

その結果、

- 1) 子どもの帰属のスタイルの分布においては、 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が認められ、偏りが認められた。原因の所在において内的帰属するものが多いことが示された。
- 2) 原因の所在と永続性を独立変数、レジリエンスを従属変数とした二要因の分散分析を行ったところ、友人トラブル場面では未来志向とレジリエンス合計において帰属の永続性要因の主効果が認められた。学業失敗場面では興味関心とレジリエンス合計において帰属の永続性の要因に主効果が認められた。

これらのことから今後、レジリエンスを高める授業

を行っていく際には、帰属スタイルの永続性の要因に着目していく必要があることが示唆された。

#### 文献

- 1) 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理特性—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究 35, 57-65.
- 2) Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990) Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology* 2 (4), 425-444.
- 3) 庄司順一 (2009) リジリエンスについて. *人間福祉学研究* 2 (1), 35-47.
- 4) 森敏昭・清水益治・石田潤 (2002) 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. *学校教育実践学* 研究 8, 179-187.
- 5) 原郁水・都築繁幸 (2013) 保健教育への応用を目指したレジリエンス育成プログラムに関する文献的考察 *教科開発学論集* 1, 225-236.
- 6) Marttin-Krumm, C. P., Aarrazin, P. G., Peterson, C., & Famose, J. P. (2003) Explanatory style and resilience after sports failure. *Personality and Individual Difference* 35, 1685-1695.
- 7) Skodol, A. E., Bender, D. S., Pagano, M. E., et al. (2007) Positive childhood experiences: Resilience and recovery from personality disorder in early adulthood. *Journal of Clinical Psychiatry* 68 (7), 1102-1108.
- 8) 原郁水, 古田真司 (2013) 小学生のレジリエンスとつらい経験・うれしい経験との関連, *東海学校保健研究* 37 (1), 77-87.
- 9) Thomsen, K (2002) Building resilient students: Integrating resiliency into what you already know and do. *Crowin press, California*.
- 10) 下川朋子・室田洋子 (2009) 児童期における精神的回復力と家族コミュニケーションおよびソーシャルサポートとの関連 *聖徳大学児童学研究紀要* 11, 59-66.
- 11) 葛西真記・藤井美沙子 (2013) レジリエンスの形成過程: 回想された両親像に注目して *鳴門教育大学研究紀要* 28, 295-306.
- 12) Wyman, P. A., Cowen, E. L., Work, W. C. et al. (1999) Caregiving and Developmental Factors Differentiating Young At - Risk Urban Children Showing Resilient versus Stress - Affected Outcomes: A Replication and Extension. *Child Development* 70 (3), 645-659.

- 13) 豊田弘司 (2012) 対人感情に及ぼす原因帰属の効果における性差 教育実践開発研究センター研究紀要 21, 1-8.
- 14) Seligman, M : Learned Optimism. New York: A.A. Knopf.
- 15) Gillham, J. S., Brunwasser, M., and Freres, D. R. (2008) Preventing depression in early adolescence: The Penn Resiliency Program In J. RZ Abela & BL Hankin (Eds.), Handbook of Depression in Children and Adolescents 309-322.
- 16) 増田真也 (1993) 抑うつの原因帰属モデルに関する研究--生活事件と帰属スタイルの交互作用について 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 38, 51-57.
- 17) 藤南佳代・園田明人 (1994) ストレス反応に及ぼすストレス量と楽観性の効果 心理学研究 65 (4), 312-320.
- 18) 家接哲次・小玉正博・田上不二夫 (2001) 内的安定的帰属スタイルと抑うつとの関係の検討. 筑波大学心理学研究 23, 169-177.
- 19) 岡崎由美子・安藤美華代 (2010) 小学生の学校生活における心理社会的ストレスと心理教育的アプローチ. 岡山大学教育学実践総合センター紀要 48, 107-118.
- 20) 原郁水・都築繁幸 (2016) 小学校5年生のレジリエンスと回復経験との関連 日本教育保健学会年報 23, 25-32.
- 21) 青柳肇・細田一秋 (1992) 学習性無力感に関する研究: その8 解決不可能課題遂行後の快・不快刺激の提示が後続の課題遂行に及ぼす効果研究 早稲田大学人間科学研究 5 (1), 65-70.
- 22) 古川雅文・松林淑子・浅川潔司 (2002) 児童の楽観的帰属様式の測定. 日本教育心理学会総会発表論文集 44, 319.
- 23) 丹羽洋子 (1989) 児童の達成における原因帰属一環状反応について 教育心理学研究 37, 11-19.
- 24) Abramson, L. Y., Matalsky, G. I., & Alloy, L. B. (1989) Hopelessness Depression: A theory-based subtype of depression. Psychological Review 96, 358-372.
- 25) 渡辺弥生 (2014) 自尊感情とレジリエンスを育てる 教育と医学 62 (1), 12-21.